

実質化された人・農地プラン

市町村名	対象地区名（地区内集落名）	作成年月日	直近の更新年月日
岩国市	阿賀地域（渋谷集落、北原集落、仏原集落、郷集落、湯の迫集落、西集落、片山集落）	令和3年3月23日	

1 対象地区の現状

①地区内の耕地面積	31.1 ha
②アンケート調査等に回答した地区内の農地所有者又は耕作者の耕作面積の合計	22.3 ha
③地区内における 70才以上の農業者の耕作面積の合計	15.1 ha
i うち後継者未定の農業者の耕作面積の合計	3.6 ha
ii うち後継者について不明の農業者の耕作面積の合計	6.1 ha
④地区内において今後中心経営体が引き受ける意向のある耕作面積の合計	0.2 ha
(備考) 平成19年3月に農事組合法人を設立。	

注1：③の「70才以上」には、地域の実情に応じて、5～10年後の農地利用を議論する上で適切な年齢を記載します。
注2：④の面積は、下記の「(参考)中心経営体」の「今後の農地の引受けの意向」欄の「経営面積」の合計から「現状」欄の「経営面積」の合計を差し引いた面積を記載します。
注3：アンケート等により、農地中間管理機構の活用や基盤整備の実施、作物生産や鳥獣被害防止対策、災害対策等に関する意向を把握した場合には、備考欄に地区の現状に関するデータとして記載してください。
注4：プランには、話合いに活用した地図を添付してください。

2 対象地区の課題

地区内の耕作面積の半数近くの農地を70才以上の農業者が耕作しており、農業者の高齢化が進んでいる。また、70才以上の農業者の3割程度が後継者が決まっておらず、後継者不足も心配される。法人も大幅な経営面積の増加は難しいため、新たな農地の受け手の確保が必要である。

注：「課題」欄には、「現状」を基に話合いを通じて提示された課題を記載してください。

3 対象地区内における中心経営体への農地の集約化に関する方針

・阿賀地域は、原則として話し合いのもと法人に、農地集積・集約をしていくほか、認定農業者や認定新規就農者の受け入れを促進することにより対応していく。
・今後の方向性を地域で話し合う場を設ける。

注1：中心経営体への農地の集約化に関する将来方針は、対象地区を原則として集落ごとに細分化して作成することを想定していますが、その「集落」の範囲は、地域の実情に応じて柔軟に設定してください。
注2：「中心経営体」には、認定農業者、認定新規就農者、経営所得安定対策の対象となる法人化や農地の利用集積を行うことが確実と市町村が判断する集落営農及び市町村の基本構想に示す目標とする所得水準を達成している経営体等が位置付けられます。

(参考) 中心経営体

属性	農業者 (氏名・名称)	現状		今後の農地の引受けの意向		
		経営作目	経営面積	経営作目	経営面積	農業を営む範囲
計	5 人		14.3 ha		14.6 ha	

注1:「属性」欄には、個人の認定農業者は「認農」、法人の認定農業者は「認農法」、認定新規就農者は「認就」、法人化や農地集積を行うことが確実であると市町村が判断する集落営農は「集」、基本構想水準到達者は「到達」と記載します。

注2:「今後の農地の引受けの意向」欄については、現状からおおむね5年から10年後の意向を記載します。

注3:「経営面積」欄には、プランの対象地区内における中心経営体の経営面積を記載します。

4 3の方針を実現するために必要な取組に関する方針(任意記載事項)

【農地の貸付等の意向】

高齢化等の理由により、法人に農地を任せたいという意見が多数である。

【農地中間管理機構の活用】

農地所有者は、出し手・受け手にかかわらず、原則として、農地を機構に貸し付けていく。

中心経営体の高齢化等により、営農の継続が困難になった場合には、農地バンクの機能を活用し、農地の一時保全管理や、新たな受け手への付け替えをすすめることができるよう、機構を通じて中心経営体への貸し付けを進めていく。

【新規就農者の経営安定に向けた取組み】

新規就農者に対する多種支援制度を活用するとともに、新規参入者が円滑に農業できるよう地元が協力し、経営の安定を図る。

(留意事項)

本様式をそのまま公表様式として活用する場合には、中心経営体の氏名等特定の個人が識別される情報が含まれることから、本人の同意を得る等個人情報保護条例等に抵触しないよう留意してください。

なお、本人の同意が得られない場合には、その方の氏名を伏せるなど、個人が識別されないよう留意してください。